

森の番人

三ツツ





・森の番人 ミリシヤ

里に通じる森の一画の守護を任された若きエルフの女戦士。

性格はいたって真面目で実直、厳しい訓練も黙々とこなしその精神と肉体に相応しい使命を与えられ、本人もまたそれを誇りに感じている。

しかしあくる日、森に侵入してきた盗賊の一団が彼女の運命を深い闇の奥底へと誘うこととなる。

A character with short, spiky blue hair and red skin is shown in a forest setting. She is wearing a blue and white outfit with a high collar and a black belt. Her right arm is raised, and she has a surprised or excited expression. The background is a dense forest with tall trees and green foliage.

それはある日の「ジュ」……

「異常なし……っと」

繰り返される日常が気の緩みを生んだのか、ミリシヤは背後の盗賊達の気配を見逃していた。

そして、その隙をついて彼らは行動をおこした。



突然の敗北

不意を突かれた上に
複数人で襲われ、た
やすくねじふせられ
た。



「なっ……何を！」

装備をはぎ取った後、
盗賊達はミリシヤの肉
体に手を伸ばす。
彼らの荒い息遣いが彼
女の肌にかかる。



「んぐっ……んん……」

激痛とともに下半
身に異物が挿入さ
れる。

それは彼女にとって初め
ての経験であり、耐え難
い屈辱であったが、装備
を奪われ抗う力も残さ
れていない今となっては
ただその痛みを受け入
れるしかなかった。




「……こんなものを
ロ……」

先ほどまで自身の下
半身に入れられてい
たものがミリシヤの目
の前に突き出される。

「んぐぐぐ……んぐぐ……」


複数の男たちに抑え込まれ、力
ずくで肉棒を啜えさせられる。
男たちが入れ替わるたびに熱
く濁った液体が喉の奥を通過し
ミリシヤの口から苦悶と嗚咽ま
じりの声が漏れる。





そしてミリシヤは盗賊ら
のアジトの連れていかれ
地下に監禁される。

その際、肉体に辱める目的
での装飾が施され、ただ男
達の都合によって弄ばれる
玩具としての日々が始まる。



たまたに盗賊達が戯れで
彼女の穴に、道具を挿
入していく。

「おお……んんおおお」

くぐもった喘ぎを漏らす度
に響くせせら笑い声、彼らを
喜ばせると知りつつも、長時
間の拘束によって鈍化した感
覚が久方ぶりの快楽を捕らえ
て離さない。




そうして拘束を解かれた後、男たちの前で体を開かされる。

繰り返される度に、恥辱と
いった感情は薄れ、次第に
期待と高揚感がミリシヤの
心を揺れ動かしていく。



「んっ……臭くて……
太い……はあん♡」

男のものをなめさせられ
つつ突き立てられる快樂
に意識が侵されていく。
もはや彼女にとっての日常
であり、さほど特別な
ことですらない。



今度はおもむろに
顔にイチモツを押
しつける。

「ん……むう……」
遅しく屹立した肉
棒に顔をうずめな
がら、熱い吐息を
漏らす。



口に咥えたソレから
熱いものが流れこん
でくる。

繰り返される度に嫌
悪感が薄れ、今とな
っては自ら求める程
にむしゃぶりつくミニ
シヤの姿があった。

次にミリシヤは男の肉棒
を自分の谷間に挟んで
みせた。

「お…お手伝いします
から…たくさん出
して下さいね…」


潤んだ瞳でそっぴいながら
いきりたったイチモツを自
分の谷間で愛撫し始める。

「んはあ……もつとお、
もつと……臭いのち
ようだい……」

「もつと」

もつとおおおー！」

男たちの精液がミリシヤの
喉に注ぎ込まれる。
淫靡な熱気と、むせ返る匂
いの中、その行為は彼らが
満足するまで続けられた。



そしてあくる日も、盗賊らの性欲の捌け口として牢から出される。

ミリシヤは何の抵抗もせず股を開いて、男達の行為を待った。
「ハアア……早く……お願いします……んハアツ！」



男たちの責めが容赦なく貫く。


痛みと苦しみが無意識の抵抗を生み、複数人の手に抑え込まれながら苦悶の声を漏らす。

「ウグッ！」

「ヒグッ！」

「アグう！」


二つの穴を同時に責められながら、相反する感覚が次第に溶け合っていく。苦痛と快楽……頭を貫く刺激がその精神を犯してゆく。



こうして毎夜数えきれない人数の相手をさせられた後、まるでゴミクズのように牢に戻る。

その頃には、ミリシヤに体を動かす気力は残されておらず。

地に伏せたまま排泄をしては翌日看守役の男たちに折檻されるといふ、人として最低限の尊厳すら踏みにじられる境遇へと堕ちた……そして……



やがて盗賊の一団の中に
武器を携えた、異様な恰
好をしたミリシヤの姿が
そこにあった。

「ん……ハァ……いっぱい殺せ
ば……たくさんイカせても
らえるんですよね……」

自らの股間を慰めながらそ
う懇願する彼女の瞳にかつ
ての理性はなく、一時の快
楽のために戦場に立つ日々
が続いた。

年月が過ぎ……

戦場での傷が原因で兵士としての価値がなくなった彼女は、その後盗賊達の奴隷として地下につながれることとなる。

糞と乳、肉と汁、穴と子宮……薄暗い地下で家畜同然の搾取とそれに悶える彼女の喘ぎ声。およそ精神か肉体が破壊されるまで、その恥辱と悦楽の日々は繰り返されることだろう。











































